高津区おはなしアーカイブ

●鈴木　克明（すずき　かつあき）さん
昭和１９年生まれ　６９歳
川崎市高津区溝の口在住

◆どんな子ども時代をお過ごしですか

大山街道沿いの株式会社「写真のたなかや」２代目社長です。ここで生まれ育ちました。

幼稚園は洗足幼稚園に通い、舗装されていない砂利道を３０分歩いて通っていました。この砂利道を通る車が石を跳ね飛ばし、店のウィンドウが割られたこともありました。

洗足小学校に1年通い、2年生から世田谷区の尾山台小学校に通いました。母が女手ひとりで経営している写真館でしたが楽ではなく、私立より公立に通わせたのです。当時店の前の高津小学校は一学年3部授業でしたが、尾山台小は2部制でしたので転校しました。洗足幼・小時代は友達もいましたが、尾山台小に転校してからは、授業が終わったら遊ぶ時間もなく、すぐ帰宅し店番をしていました。そのため友達もあまり出来ず母子２人の生活でした。学校の宿題で電灯の光が黄色く、地図の黄色い線の部分が見えなかったことを覚えています。正月は母が写真館の仕事をしていましたから、隣りの商店の男の子と遊んだりしました。

教育熱心な親で、登校する前に漢字練習をさせられたり、家庭教師もつきました。そのせいか、成績が良かったのでしょうか、尾山台中学、玉川高校では入学式の挨拶を朝礼時、新入生の代表でしました。いまだに中学高校のクラス会を開いています。

秋祭りやお会式では、母から屋台の食べ物を買い食いしてはいけないといわれ、また、多摩川も危険だから泳ぐなと言われていました。

◆お店を継いだいきさつは

小学校5年のときに１０年間闘病していた父が亡くなりました。中学生になると、写真の修整を頼みに1週間に2～3回、目蒲線で蒲田・女塚の修整技師さんまで頼みに行っていました。縁とは面白いもので、この修正技師のお孫さんが、偶然当店に勤めたこともありました。

私は最初から写真が好きで継いだのではなく、高校3年で進路を考えた時に家業を継ごうと決めました。

大学は日大芸術学部と東京写真短期大学と、どちらに入学手続きをしようかと迷いましたが、修整の授業のある東京写真短期大学に決めました。卒業後大井町にある成瀬写真場で1年間修行しました。

昭和４１年家に戻り、母と一緒に仕事に入りました。その後助産婦の吉野寄里枝と結婚し、従業員も入れ、頑張って店を大きくしてきました。商

店街の副会長、協同組合日本写真館協会副理事長や、今は解散しましたが、社団法人日本婚礼写真協会副会長なども経験しました。今は川崎写真師会会長、神奈川県写真師会副会長を務めています。

今、３０歳になる息子が「写真にあまり興味がなかったけれど宿命だ」とやはり私と同じようなことを言って継いでますよ(笑)。

◆「写真のたなかや」の歴史を

元々、鈴木家の家系は、１７３６年に田中半左之門という人が、たなかやを創業したようです。油田中と言われ油などを商っていたそうです。明治に入り全国で銀行ラッシュが始まった時、地元でも有志が高津銀行を今の川信高津支店のある場所につくりました。ところが昭和恐慌の時に倒産してしまい、その頃の株主は今と違って無限責任で損害を全て自分の財産で補填しなくてはいけなかったそうです。そこで総本家は途絶えました。総本家から分かれた新家（しんや）と呼ばれた現在のタナカヤ呉服店で明治４４年父孝が生まれました。父は麻布中学から慶応の経済に進みましたが、胸を病み、療養中に写真に興味を持ち昭和１６年２９歳で現在地に写真館を開くにいたりました。建物東側はスラント造りといわれる1階から2階部分までガラスが貼られ、自然光を取り入れて撮影する当時では最先端の写真館でした。それまでは当時写真技術では日本一といわれた東条写真館の修整を担当したりし、写真の勉強をしていました。今年で創業７３年になります。昭和１８年に銀行員だった横川マサと結婚し、翌年私が生まれました。店の1階は写場（スタジオ）でしたが、わたしが生まれた時から父の具合が悪くなり2階でずっと寝付いてしまいました。母は店を守り、わからないことがあると2階に駆け上がり、色々と父に聞いて撮影、現像を一人でこなしていました。

終戦後父が横浜の療養所に入院しました。父から母に宛てた手紙が今でも多数残っています。内容は技術指導やウィンドウへの写真の飾り方とか、写真の通信教育みたいなものでした。私は幼稚園の時にツベルクリン反応が陽性になったので、結核の父とはそれから会えませんでした。結局昭和３０年父はお骨になって家に帰ってきました。

父の療養中、母は結婚式の写真を頼まれ、農家の自宅まで自転車の後ろに暗箱（昔の大きな木製写真機）をくくりつけ、マグネシウムをたいて撮影してきました。撮影時にはマグネシウムが火の玉のように光り、白い粉が飛ぶので披露宴の料理にふりかからないように料理を紙で覆っていました。また当時、高津警察署に鑑識課がなく、警察が母を迎えにジープでやってきて、首吊り現場や進駐軍が橋の上から撃った弾が河原で遊んでいた子供の頭を貫通した事件現場など、男でもひるむような撮影をしていました。

そういう写真は子供の私には見せませんでしたね。私が覚えているのは、母が多摩川べりの料亭からの依頼で、屋形船に乗った力道山の写真を写しに行ったことや、銀行の一日店長で高津に来ていた歌手の畠山みどりさんを写したことなどです。

私の長女が小学6年の自由研究で「写真のたなかや」を調べて模造紙に書いて出したら、優秀賞をいただきました。それによると

１９４４年頃　兵隊さんの写真を撮る。その後アメリカ兵も撮る。
１９４８年頃　結婚式の写真も出張で写す。
１９６４年頃　ＤＰＥカラー写真１枚７０円。オリンピックの年でカラー写真が流行。
１９６６年頃　ポラロイドを使ったスピード写真を取り入れる。
１９７０年頃　自動車運転免許の写真撮影で忙しくなる。
１９８２年頃　ビデオの仕事始める。
１９８４年　４階建てのビルになり「写真のたなかや」新オープン。

とあります。

◆地元での活動をお聞かせください

昭和４８年頃に高津青年会議に入会しました。ここで友人ができました。当時のメンバーは４、５０人いましたが、会員減少で今年、残念ながら活動を休止し、しばらく休会となります。青年会議活動では「大山まで歩こう」会を企画しました。「１万歩歩こう会」の石塚会長から白装束の衣装を借りて着、朝４時に高津の十字路を出発しました。総勢９名。伴走の自動車を１台用意しました。前の晩に地図をコピーしたり準備で寝なかったので私は途中車に乗せてもらい完走できませんでした。大山阿夫利神社まで完走したのは２０代の２名だけでした。１３時間かかりました。他に、区役所から頼まれて高津の風景風俗を１年間のビデオにしました。高津地区編と橘地区編、総集編と別々に３種類作っておさめ、区内学校図書館区役所等に配られました。忙しかったですが、高津区の隅々までまわれ楽しかったです。

ロータリークラブのメンバーにもなり、「夏休み子供一日職業体験クラブ」を企画しました。子どもが大人の大変さを見て、多少経験もし、家にいるお父さんを見直してほしいという気持ちで実行しました。文教堂書店、ホテルＫＳＰ、保育園、郵便局、移動動物園、保健所、図書館、友禅染、写真館等１２カ所が小学生高学年、中学生を受け入れてくれました。３年後に西高津中学校が授業の一環として実施したいと言うので、最初の１年受け入れ事業所を探して、中学校に紹介しました。文化体験も子どもたちに体験させたいと、職業体験の２年目から「夏休み子供１日文化体験」として高津区文化協会の中で企画し、華道、茶道、日本舞踊、座禅、友禅染、写真館等、自宅事業所や市民館、てくのかわさき、ふるさと館等を会場として行い、１０年以上たった今でも継続事業になっています。当初は材料費等費用は全て講師の負担でしたが、今は材料費くらいは集めているようです。高津小学校のＰＴＡ役員になり、高津区ＰＴＡ連絡協議会の副会長を３年務めました。高津小ではＰＴＡ対象の講演会にドイツ学園の教頭先生を招き、ドイツの子育てについて話していただきました。

◆今までの忘れられない思い出は

東京写真短期大学の卒業制作で提灯やさんを写した組写真が選ばれて銀座のフジフィルムギャラリーで展示されたことです。昭和３８年高津小の木造校舎が火事になったとき撮影した写真が新聞に載りました。国家検定・一級肖像写真技能士の資格を神奈川県の第一号で取れたことも思い出です。神奈川県めっき工業組合からの依頼でめっきの教育ビデオを数年かけて７種類作りました。神

奈川県各地から新潟県まで出かけ、めっき工場の現場また実験風景なども撮影編集しました。このビデオはめっき組合が全国販売していました。写真館協会の機関紙「ザ写真館」の「頑張る写真館」特集記事を提案し、１４年間北海道から沖縄までほとんど日本全県の写真館を妻を同行して取材しました。２年前に妻の寄里枝が大動脈乖離になり、板橋の日大病院で緊急手術の結果、幸運にも命を取り留めたことが最大に良かったことです。

◆４０年間ともに歩んできた夫人の寄里枝さんからの感想は

私は、助産師という全く違う職業から結婚してこの写真という世界に飛び込みました。それは、銀行員だった義母に続いて、同じような道をたどったと思っています。

一時は、自宅で講師として助産師の卵たちに教えたり、そのかたわら、自分の赤ん坊を実家の母に預けながらも写真学校に通いました。その学校では、授業の休み時間に溢れる母乳をトイレに搾りにいったり、先生にカメラのことで質問攻めにしたり、懐かしい思い出です。

３人の子どもの母ですが、子育てでは、出産のたびに上京してくれた実母の応援なしでは考えられません。

商売が忙しくなったときは、末っ子をおんぶして、１日３０組の撮影をしたときもありました。子どもたちの入学式、学芸会は一度も見たことがありません。ただ、運動会の徒競走のときだけは、「お客さん、ちょっと待ってて」と言って、こっちも走って見に行けました。なぜならスタートのピストルの音が聞こえますから、出番がだいたいわかるのですよ(笑)。

なりふり構わず、頑張ってきました。でも自分なりに店での制服は見苦しくないように、上が白で下が黒という基本スタイルに決めています。

会社の経営は、地元育ちの夫が企画マン、私が実行マンの二人三脚です。これからもお互いの健康を大事にしながら、子どもたちや社員と頑張っていきたいと思います。

（平成２５年１０月１８日）